蝦夷から北海道への黎明期に開鑿された蝦夷地山道物語(上)

寛政・文化の年代は主として東蝦夷地に主力を注いでいたが安政以降は西蝦夷地にも力を注ぐことにした。奉行は場所請負人に命じて道路の開削を積極的に行わせ、さらには篤志家にも道路の開削を奨励したので、この時代は西蝦夷地にも多くの道路が開削された。これはロシアの南下に対する蝦夷地の警護と商業上の必要性があったからである。本編は篤志家の鈴鹿甚右衛門が開削した「狩場山道」についての物語である。

道路雑学研究家
三浦　宏
1987年北海道開発局を退き、現在(社)北海道開発技術センター　常任参与
著書:「北海道の峠物語」等　多数

1855年(安政2)2月、ロシアの南下に備えるため松前藩に蝦夷地の防備をまかせるには心もとない、と幕府は考え、西蝦夷地の一部を松前藩に残して全てを直轄支配することにした。そして箱館に奉行を置いた。しかし、箱館と西蝦夷地の連絡通路は、木古内山道の一本よりなく、しかも回り道であって、熊石以北は断崖絶壁が海に迫り、歩行さえ危ぶまれている状態であった。しかし、西蝦夷地の防備には一日も早くこの問題を解決しなければならなかったが、多額の工費がかかることから奉行も困っていた。

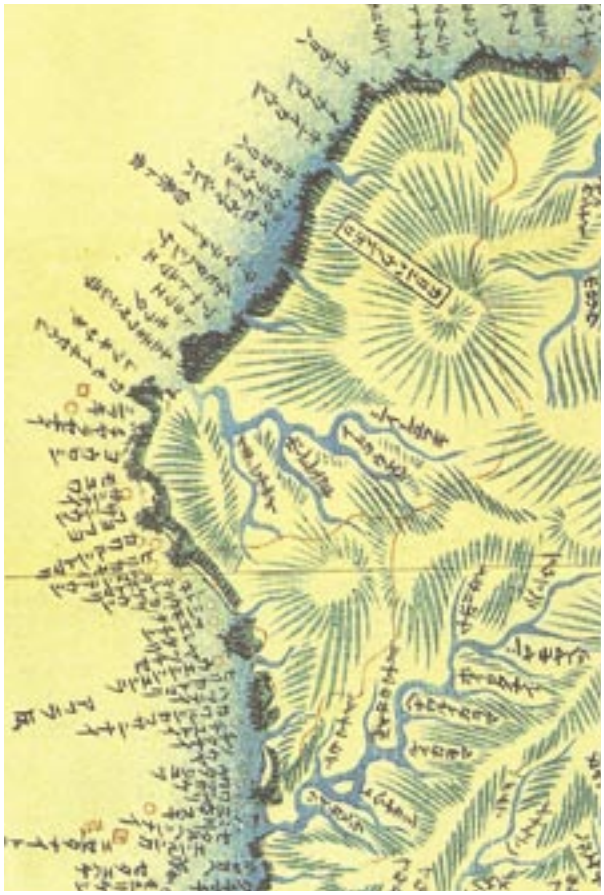
このころ長崎では中国貿易が輸入超過となり、大切な銅の流出を防ぐため「長崎俵物」と呼ばれていた蝦夷地特産のイリコや、干しアワビ、干しシイタケなどを輸出して調整していた。この主産地が熊石以北であって、一旦江差に集荷して船便で箱館まで運ばなくてはならなかった。そこでどうしても陸路で運ぶことが必要となった。

こうした情勢下で御用商人となった橋本屋甚右衛門は、公的には産業開発のため、私的には商圏拡大のために、その協力者長坂庄兵衛とによって西在郷と場所とを結ぶ「狩場山道」と「太田山道」を、また、麓長吉の協力による江差と箱館とを結ぶ「鶉山道」の開削を行った。そして山道開削の功労者として不滅の名を留めているものであるこれは商人の立場からすると「企業投資」が動機の一つであったことに違いないが、その功績を多とすべきであろう。

先代甚右衛門は、近江の国の出身で文政年間1820年代に全盛期の江差にやってきた。屋号を橋本屋とし呉服の暖簾を張り、商売熱心もあって店は繁盛した。その跡目を継ぐ甚右衛門の長男甚助(文政2年生まれ＝1819)は、父に仕込まれ父の片腕として家業に励み、橋本屋の商圏を広げ、ニシンの仕込みにも当たり、蝦夷地でも指折りの豪商になってきた。そして1857年(安政4)に父甚右衛門の死去により、その跡目を襲名して家督を継ぐ。

長坂庄兵衛は津軽で1826年(文政9)に生まれ、1846年(弘化3)父に従い江差にやってきて鰊漁を営んだが失敗、美国・積丹場所に出稼ぎしたりしていた。庄兵衛はその経験から陸路で場所と場所とをつなぐ道路の必要性を痛感、山道の開削を思い立ち、江差の有志に説いて廻り協力者を求めた。しかし、協力者はなかなか見つからず、計画は挫折かと思われた。そこで甚右衛門に会いその志を述べ、長男甚助の助言もあって父子の全面協力を得ることができたのであった。

甚右衛門親子は、道路開削工事にも経験のあった



松浦武四郎「東西蝦夷山川地理取調図」

この庄兵衛と相談し、山道開削を計画し、奉行に願い出る。奉行は「右場所は海上の通路のみにて陸路無之往來の諸人難儀に及ぶ處此度願ふ所の道筋出來いたす上は、往來の便利のみならず、永久の利用莫大なるべし」(『北海道道路誌』)として許可を与えた。両人は勇気百倍して開削に着手する。

1857年(安政4)甚助は越後・佐渡・能登に、また、庄兵衛は津軽へと出向いて人夫を募った。200名に達したという。しかし、準備を急ぐさなかの1月、甚右衛門がこの世を去る。甚助は庄兵衛の志を知り、父に勧めたこの事業の主張者であったからこの跡目を襲名し父の遺志を継いで喪中にもかかわらず、工事に取りかかった。

「狩場山道」は太櫓場所から島小牧場所に通ずる狩場山越えの難路であって、従来茂津多岬を船で越しいて、西蝦夷地三険岬の一つといわれた大難所であった。

山道の開削は「名だたる難所の連続であった。雑木が茂ってやぶがからみあい、あるいは大きな岩石がそそり立って行くてをさえぎり、時には落石で人夫が傷つくという事故もあった。このため人夫たちは工事の中止を迫ったことも一度や二度ではなかったが、甚右衛門はその都度なだめすかして工事を急いだ。その結果、まず関内－太櫓間の太田山道四十八キロが完成した。さらに延長して五八年六月には瀬棚－島小牧間四十二キロが完工した。この間鶉山道四十四キロは五七年九月に完成し、ここに甚右衛門父子の悲願が達成されたのである。かれは父の霊前に工事終了を報告した。甚右衛門がこの工事に費やした金額は実に四千七百五十五両に達した。五九年五月、箱館奉行はかれの功績をたたえて苗字を許した。甚右衛門が鈴鹿の姓を名乗ったのはこのときからであり、庄兵衛もまた長坂の苗字を許された。新道はえぞ地を守る生命線となったばかりでなく甚右衛門は長崎俵物を一手に買い付けて、この山道を利用した。」(『開拓の群像－下』)のであった。

言語に絶する難工事だった。人夫を6組に分け、関内から寿都界まで36里間に1里毎に1組を配置して、5箇所に宿舎を設け夜を日についで工事を急いだ。「山高く、谷深く、架橋實に四十箇所に及び、五人の死者、二十五人の負傷者を出したほどなので、工夫の逃亡者相い次ぎ豫定の五倍の日子を費やし、十月四日に竣功したが、その工費は實に豫定の三倍、四千兩に達した。關内・太櫓間を太田山道、瀬棚・島小牧間を狩場山道と稱したが、共に難道と稱された。時恰も箱館奉行が蝦夷地移住を奬勵し、神威岬以北に婦人が入地する禁制を解き、鰊大網の使用を許したため、奥羽の凶作、函館地方の災害等により、奥羽、松前の入稼が多く、日本海の漁場が著しく活況を來した際であったのでこの道路の開通はこれ等のために非常に便宜となった。」(『北の先覚』)。

甚右衛門は、1861年(文久9)8月26日43歳で病没する。「學問あり、禮節あり、勤儉を重んじ、公益につとめ、家業を見たのは僅か四年半に過ぎなかった。力行よく亡父の遺志を遺憾なく發揮して不朽の大事業を残したのである。」と『北の先覚』に記されている。

1915年(大正4)年11月10日、甚右衛門の功績を称え、特旨をもって従五位が贈られ、翌大正5年10月、曾孫秀二郎はこの甚右衛門の栄誉を称えその功績を永く後世に伝えるため、江差町の氏神、姥神神社境内に顕彰碑を建てた。「こうして鈴鹿甚右衛門が私財を投じて、西海岸道路江差から熊石・久遠・寿都場所に通ずる久遠街道と、渡島の山脈を横断して箱館と江差を結ぶ鶉街道を開通したことは、場所経営、沿岸警備の上だけでなく、あらゆる面で画期的なことである。特に鶉街道は江差・箱館往還の早道として利用度も高く、大きな役割を果たすことになる。」(『江差町史第五巻通説一』)。

箱館奉行はこの甚右衛門の山道開削の功績に対して「永代苗字」を許し、賞として裃壱具を贈り、賞状を贈ってその功績を称えている。いうまでもなく「鈴鹿甚右衛門は江差在住の商人である。商人である以上四千七百余両という巨額の私財消費は、単なる消費であれば甚大な損失でなければならない。」。このことで箱館奉行所の御用商人の地位を獲得し、長崎俵物の買付け人としてその集荷輸送の権を得、その他奉行支配下で種々の企業を興している。

北海道神宮の境内にある開拓神社には「鈴鹿甚右衛門命　二代目　近江の人　道南山道の開削　公益事業に貢献とし神として祀られている甚右衛門の商人の立場からは才覚に発する企業投資であったとしても、こうした公益事業そのものの光彩は色褪せるものではなく、その功績は永遠に称えられるべきもので、顕彰されるべきものである。」と『江差町史』はいう。

鈴鹿甚右衛門顕彰之碑

狩場山道20万分の1地形図
(昭和9年)